

# 令和3年度 第1回 総合教育会議

令和3年7月6日（火）  
午後2時から4時まで  
県庁別館20階第一会議室A、B

## 次 第

### 1 開会

- (1) 知事挨拶
- (2) 教育長挨拶

### 2 議事

- (1) ICTを活用した教育の推進と新時代の教員育成  
[資料1～3]
- (2) 誰もがスポーツ・文化芸術活動に親しめる環境の整備  
[資料4～6]
- (3) その他

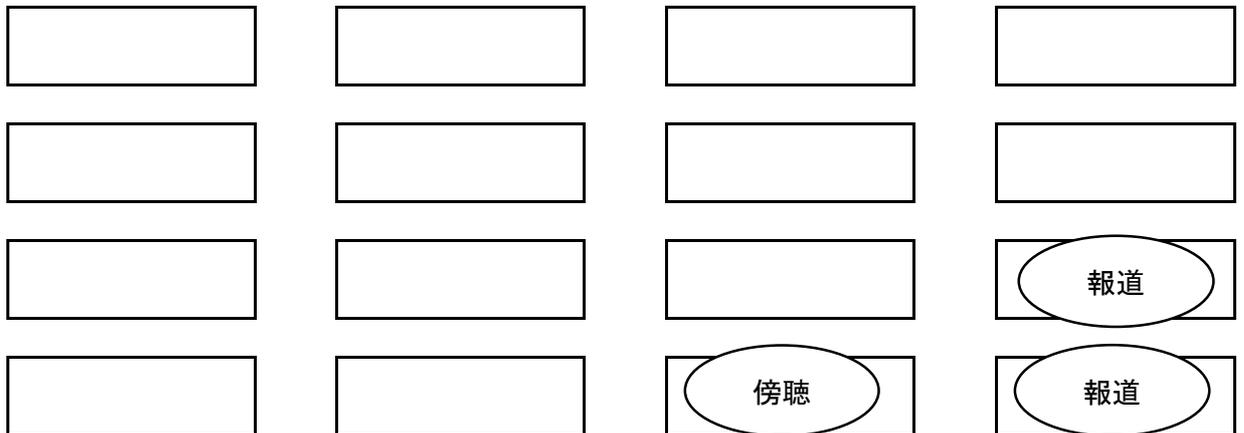
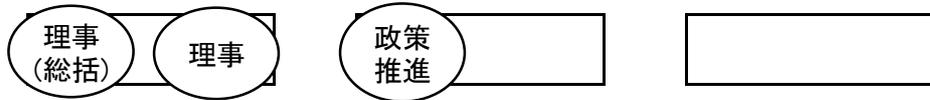
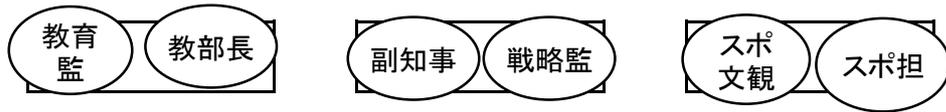
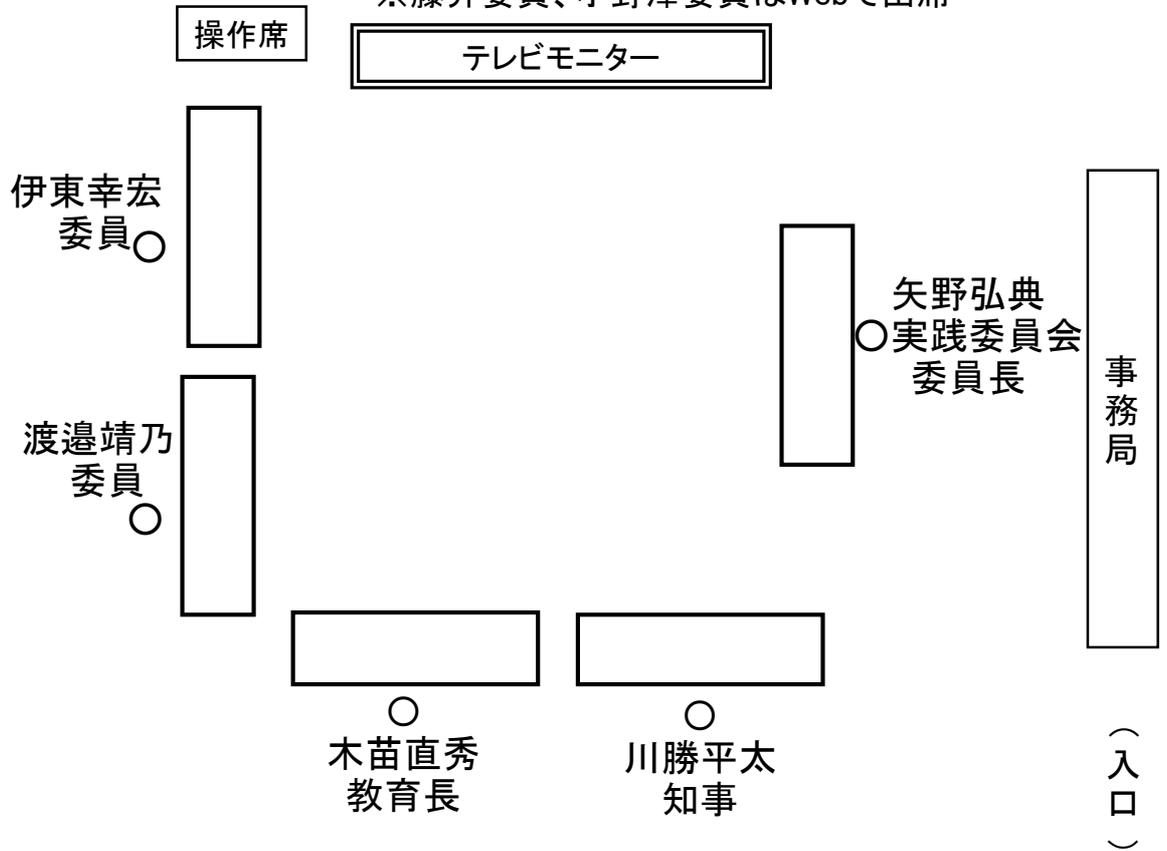
### 3 閉会

# 令和3年度 第1回総合教育会議 座席表

日時: 令和3年7月6日(火)14時~16時

場所: 県庁別館20階第1会議室A、B

※藤井委員、小野澤委員はWebで出席



## 令和3年度総合教育会議 年間スケジュール（予定）

回数	開催日	協議事項
第1回	7月6日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ICTを活用した教育の推進と新時代の教員育成</li> <li>・誰もがスポーツ・文化芸術活動に親しめる環境の整備</li> </ul>
第2回	10月22日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・誰一人取り残さない学びの保障</li> <li>・教育に関する大綱(基本的考え方)</li> </ul>
第3回	1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域(実社会)と連携した高等学校教育の在り方 (小委員会中間報告)</li> <li>・教育に関する大綱(素案)</li> <li>・教育振興基本計画(素案)</li> </ul>
第4回	3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域(実社会)と連携した高等学校教育の在り方 (小委員会最終報告)</li> <li>・教育に関する大綱(案)</li> <li>・教育振興基本計画(案)</li> <li>・令和3年度協議事項への対応(報告)</li> <li>・令和4年度協議事項</li> </ul>

## 「ICTを活用した教育の推進と新時代の教員育成」に関する論点

技術革新が進展し、社会を大きく変えていく超スマート社会（Society5.0）が到来しつつあり、社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難になっているが、新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大により、「ニューノーマル」への移行が求められるなど、先行きは一層不透明となっている。

こうした時代においては、様々な変化や課題が生じると見込まれるため、特定の分野の知識や技能だけでなく、新たなことを学び、予測できない変化を前向きに受け止め、地球規模の諸課題も自らの課題として考え、責任ある行動がとれる力を身に付けていくことが重要である。

また、新型コロナウイルス感染症の影響により、登校や外出が制限される中での学びの機会や質の確保が課題となった一方で、ICTを活用した学習環境の整備が急速に進み、ICTの可能性や重要性がクローズアップされた。

全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現するため、ICTの特性を最大限活用した効果的な教育活動を進めていくとともに、ICTの活用をはじめ、Society5.0時代に求められる教員を育成していく必要がある。

### ◆論点 1：教育の質の向上に向けたICTの効果的な活用

学校教育における様々な課題の解決を図り、教育の質の向上につなげていくため、具体的にどのようなICTの活用策が考えられるか。

また、ICTの活用を進めていく上で、どのような点に留意する必要があると考えるか。

#### 【検討の視点】

- ・ ICT等の技術革新とこれからの学校教育
- ・ 教育の質の更なる向上と業務の効率化に向けたICT活用拡大の方策
- ・ ICTの活用と情操教育や実践活動との両立に向けた方策

### ◆論点 2：Society5.0時代に求められる教員の育成

教育の質の向上を図るため、教員にはどのような資質・能力が求められ、それをどのように育成していけばよいと考えられるか。

#### 【検討の視点】

- ・ 技術革新の進展等に対応した教員の資質能力及びその向上のための方策
- ・ 教員採用後を見通した大学における教員養成のあり方
- ・ 教員の負担軽減と求められる知識・技能の変化への対応

# 「ICTを活用した教育の推進と新時代の教員育成」に係る主な取組

## 1 総論

### ○ICT教育戦略室の体制強化（教育委員会教育政策課）参考資料P2

- ・令和2年8月に設置した教育委員会の関係課等による「ICT教育戦略室」について、令和3年度から企画、人材育成、環境基盤、学校支援の4チームとし、アドバイザーの助言を受けつつ、連携して実効性の高いICT教育に関する施策を展開

### ○静岡県ICT教育推進協議会の設置（教育委員会教育政策課）参考資料P3

- ・県と市町による「静岡県ICT教育推進協議会」を設置し、教育におけるICT活用に係る効率化や先進技術の共有化を図り、地域全体として格差を生まない整備に取り組むとともに、県内市町の学校や行政運営の高度化・効率化を推進

### ○ふじのくに学校教育情報化推進計画(仮称)の策定（教育委員会教育政策課）参考資料P4

- ・学校教育におけるICT活用を総合的・計画的に推進するため、令和4年度から令和7年度までを計画期間とする「ふじのくに学校教育情報化推進計画（仮称）」を策定

## 2 ハード整備・ソフト活用

### ○GIGAスクール構想に関連したICT教育機器の整備（教育委員会教育政策課）

#### 参考資料P5

- ・ICT教育の充実を図るため、オンライン学習のための貸出用端末等の環境整備や先端技術を活用した教育の実証を実施

### ○特別支援学校へのICT機器の導入（教育委員会特別支援教育課）参考資料P6

- ・県立特別支援学校に児童生徒の障害に応じた入出力支援装置を導入し、児童生徒が自らICT機器を操作し活用できる環境を整備

### ○ICT支援員等の配置（教育委員会教育政策課）参考資料P7

- ・ICT環境の整備・充実を図る取組等を支援するため、専門的な知識を持つシステムエンジニア等をICT支援員として配置

### ○ICT活用支援ポータルサイトの公開（教育委員会教育政策課）参考資料P8

- ・教職員のICTを活用した指導を支援するため、クラウドサービスの利用方法や各学校から収集した電子教材を掲載したサイトを公開

### ○ICTを活用した講義動画の共有（教育委員会教育政策課）参考資料P9

- ・各学校で作成した電子教材や、ICTを活用した指導に長けた教員による実際の授業を基にした講義動画を作成

### ○県立高校におけるEdTech導入実証（教育委員会教育政策課）参考資料P10

- ・学力向上等の効果が確認されているEdTechサービスの普及に向け、県立高校での導入実証の効果検証を行い、全校での実施を検討

### ○高校におけるBYODの導入（教育委員会教育政策課）参考資料P12

- ・県立高校において、生徒個人のスマートフォン等を授業に用いるBYODの各学校での導入を推進

### ○OLMSの導入検討（教育委員会教育政策課）参考資料P15

- ・Eラーニングによる学習の進捗状況等を管理するためのシステムであるLMSの導入を検討

### ○学校連絡・情報共有サービス「COCOO」の導入（教育委員会教育政策課）参考資料P16

- ・県立学校においてパソコンやスマートフォンによる保護者との連絡ツール「COCOO（ココウ）」を試行し、学校と保護者、教員同士の情報共有を図るとともに、利便性を高めて教員の業務負担を軽減

### ○病気療養中の高校生に対するICTを用いた学習支援（教育委員会高校教育課）参考資料P17

- ・病気療養中の生徒に対する遠隔授業の研究について、実態把握や医療関係機関との連携体制、単位認定を含めた支援体制の研究を推進

## 3 人材育成

### ○ICT活用に係る教職員研修の実施（教育委員会教育政策課）参考資料P18

- ・児童生徒の情報活用能力の育成を図り、授業や校務にコンピュータ等の情報手段が一層活用されるよう、ICT活用に係る教職員研修を実施

### ○教員養成段階におけるICT活用指導力の育成（教育委員会教育政策課）参考資料P20

- ・GIGAスクール構想や新型コロナウイルス対応の中で必要となっているICT活用指導力育成のため、教員養成を担う大学との連携を推進

## 4 モラル等の向上

### ○情報モラルの涵養（教育委員会教育政策課）参考資料P21

- ・インターネット上の誹謗中傷への対応等について教職員に対して、「人権教育の手引き」の活用や人権教育担当者研修での講演を実施

### ○ネット依存への対応（教育委員会社会教育課）参考資料P22

- ・Webシステムを活用したネット依存のセルフチェックを促進するほか、ネットの利用を見直したい小・中学生を対象に野外活動を取り入れた自然体験回復プログラムを実施

## 「ICT を活用した教育の推進と新時代の教員養成」に関する実践委員会の意見

- 教育委員会による ICT を活用した講義動画の共有の取組は素晴らしい。これに私立学校が関わるのは難しいとしても、「スーパー先生」と私立学校との交流のように垣根を越えて、静岡の教育に携わる者の英知を結集した取組を検討してほしい。
- 「スーパー先生」という言葉に違和感がある。他の先生も頑張っているが、自分は「スーパー」ではないのかと思わせてしまうのは残念である。
- 東京と大阪でのオンライン授業の実態について、失敗事例、成功事例を含めて調べてほしい。
- 先進的な取組を行っているところでは、既に ICT は売りにならない時代になっており、むしろ自分で持っている機器を学校に持ってくる BYOD のリスクをいかに減らして思い切って実施していくかの競争になっている。
- ICT は、教科書の説明等のティーチングに非常に効果がある。ICT でティーチングの部分を効率化し、意見交換や働き方改革に時間を使うといった研究を進めてほしい
- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大に対し、先回りしてオンライン授業の準備をしておくことが大事である。
- 文化・芸術に関して、子供が作った作品を展示して皆に見てもらおうようなことさえできなくなる可能性があるため、バーチャル的な展示場のアプリのようなものを今から準備すれば、芸術の秋ぐらいには見てもらえるようになる。
- 教員の育成では、ICT というと、エンジニアにならなければいけないと誤解されるが、実際にはユーザーになればよいだけである。
- これからの教員には、コーチング、ファシリテーター、メンターのスキルが必要なので、養成段階の学生や若手の教員に様々な経験をする機会を与えてほしい。
- 今は、生徒と保護者だけでなく、地域社会や経済界などステークホルダーが多様化し、教員は大変な状況になっている。このようなステークホルダーを認識しながら、具体的なロールプレイを実施する機会がもっとあると、自己肯定感が高い状態で教員生活を送ることができる。
- ICT の活用は、ティーチングにも本当に効果的で、企業や社会でいろいろなことが起きるが、どのように定着させるかが問題である。最後は、1 on 1 のきめ細やかな対応が重要になってくる。一斉学習と最後の個別学習をどのように分けて作っていくかが難しく、教員の資質が問われる。
- eラーニングの教材を作るときは、「スーパー先生」の話聞くだけでなく、分からなかったという意見を広く集めることが大事である。

- 教員の育成では、eラーニングの仕組みを使い、オンライン上でスキルを身に付けるためのノウハウを県内のどこでも学べる環境づくりが必要である。一方、どうしても分からないところは、対面又はオンライン上で質疑応答できるライブなやり取りでフォローするとよい。eラーニングと対面的な説明をうまく合わせていくことが大事である。
- ICTの効果的な活用において、LMS(学習管理システム)の潜在的可能性を強調したい。LMSのポイントは学びが蓄積されるというところにあり、生徒からすれば、自分の学習に関する情報の一元化ができ、非常に重要な振り返りのツールとなるので、早期の導入実現を希望する。
- キャリア・パスポートの活用により、自分の小学校から高校までの学びの足跡が見られるような取組が公立校でも始まっており、それが子供たちの自己肯定感につながればよい。教員は、その活用に苦心しているが、教員にとっても生徒にとっても、積み重ねてきたことが見えるのはよい。
- ICT等の様々なツールを活用することにより、教員の負担が軽くなるということは十分期待してよい。
- ICT導入は、コンテンツを組むのは大変でイニシャルコストはとても大きいですが、一度作れば少しずつ変えていけばよいのでランニングコストを小さくできるのが特色である。一方で全て自分で作る必要はなく、優れたティーチング素材を共有したり、素材集を教員が使えたりする状況ができるとよい。
- ICTによる時間短縮の点では、例えば、生徒からの質問に答えていく場合には、タブレット端末よりデスクトップの方が圧倒的に早く確実であり、教員がどのような端末を使うかも考える必要がある。
- 病気の治療をしている子供たちがICTが進展する恩恵にあずかっている面もあるが、一方で大きな病院でなければ患者向けのWi-Fiが飛んでおらず、院内学級の子供たちが取り残されてしまっている側面があるので、デジタルデバイドを考えると、この点に留意してほしい。
- ICTの利点は、瞬時に世界中がつながることである。また、オンラインで各国の高校生が語り合うことで、日本の高校生は、英語ができないとこれからの世の中は生きていけないということをまざまざと自覚することになり、英語の勉強意欲を高めるという別の副産物も出てきている。
- ICTを活用した教育は素晴らしいが、留学に勝るものはない。五感を磨くためには、ICTではできない部分が多い。ICTを利用して様々な国を学び、新型コロナウイルス感染症の収束後にオンライン上で知り合った人に会いに海外へ行きたいと思えるようなことができたらよい。
- 学校と地域をつなぐ場合、地域の方や保護者には非協力的な方がいるが、「助けてください」、「一緒に」というキーワードを出すと、仲間になってくれるということもある。

- 理科や数学を学ぶ意義について、技術を使っている企業の人が学校に来て子供に伝えてくれることで、学ぶ意欲がとても上がることを実感しているので、学校や子供たちに企業の力をいただきたい。
- 徳の教育は全人格的なものなので、地域、企業の素晴らしい方々が学校教育に参加し、子供たちとの人物対人物のぶつかり合いの中で徳を学んでいくということを主流にしてほしい。
- 人権教育は第三者として受け止める教育ではいけない。単に差別をしてはいけないというのではなく、なぜ自分はそういう差別や偏見を持っているのか考えるエモーショナルインテリジェンスが重要であり、そういうことも含めて教えていかなければならない。
- 人権教育は、教員と企業人がワークショップ等を通して課題に向き合うことで、社会的な解決方法が見出せる。そういう中で、教員も視野を広く取れるようになってくるので、地域社会に根を張っている企業とも交流を深めてほしい。そのためには、情熱のある教員や情熱のある企業人を核に、専門性を持ったプロを入れて議論していけばよい。小さな渦を大きくしていくことが大事なので、成功事例をつくっていくことが次のステップにつながる。

## 「誰もがスポーツ・文化芸術活動に親しめる環境の整備」に関する論点

「有徳の人」の育成には、「知性を高める教育」だけでなく、「技芸を磨く実学」に触れる機会を与え、多様で柔軟な教育を展開する必要がある。

令和元年にラグビーワールドカップ2019が開催され、日本代表の快進撃と合わせて大きな盛り上がりを見せた。また、本年は、東京2020オリンピック・パラリンピック及び同文化プログラムが開催されることから、これらの大規模な国際大会の開催を絶好の機会と捉え、子供たちのスポーツ・文化芸術活動の促進などに取り組むことが重要である。

こうした中、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、学校では、部活動をはじめ、様々な活動が制限されることとなった。実体験を得る場としてスポーツ・文化芸術活動の重要性が増しており、子供たちが日常的にスポーツ・文化芸術活動に親しめる環境の整備が求められる。

また、部活動については、指導者不足等の問題も抱えており、様々な制約の中で、その在り方も課題となっている。

加えて、大規模な国際大会をレガシーとして後世へ継承し、誰もがスポーツや文化芸術に親しみ、その価値への理解を深めていく取組も重要である。

### ◆論点1：子供たちがスポーツ・文化芸術活動に親しめる環境の整備

子供たちが日常的にスポーツ・文化芸術に関心を持ち、親しむことができる機会を充実させていくために、具体的にどのような取組が考えられるか。  
また、部活動やその大会等の在り方についてどのように考えるか。

#### 【検討の視点】

- ・ウィズコロナ、アフターコロナ時代において子供が日常的にスポーツ・文化芸術活動に親しむために必要な取組
- ・新型コロナウイルス感染症対策や少子化の進行、教員の多忙化等の課題や制約の下での効果的・効率的な部活動やその大会等の在り方

### ◆論点2：大規模な国際大会を契機としたスポーツ・文化芸術活動の促進

国際大会の開催を一過性のものとすることなく、スポーツ・文化芸術活動の促進につなげていくために、具体的にどのような取組が考えられるか。

#### 【検討の視点】

- ・大規模な国際大会（ラグビーワールドカップ2019、東京2020オリンピック・パラリンピック）のレガシーの活かし方

## 「誰もがスポーツ・文化芸術活動に親しめる環境の整備」に係る主な取組

### 1 スポーツの振興

#### ○スポーツ人材バンクの運用（教育委員会健康体育課）参考資料 P25

- ・中学校、高等学校の部活動及び地域のスポーツ教室等の指導者不足への対応を図るため、しずおかスポーツ人材バンクを運用し活用を促進

#### ○しずおか型部活動の推進（教育委員会健康体育課、高校教育課）参考資料 P27

- ・県立学校の部活動へ運動・文化部活動の専門的スキルを持った地域人材を外部指導者として派遣

#### ○地域部活動の推進（教育委員会健康体育課、義務教育課）参考資料 P28

- ・中学校における令和5年度以降の休日の部活動の段階的な地域移行に向け、国の委託を受けて拠点校において実践研究を実施

#### ○地域スポーツクラブ（磐田スポーツクラブ）の設置 参考資料 P29

- ・学校に希望する運動部活動がない生徒や専門的な指導が十分に受けられない生徒のスポーツ活動を支援するため、地域スポーツクラブを設置

#### ○ラグビー聖地化の取組（スポーツ・文化観光部スポーツ政策課）参考資料 P30

- ・ラグビー文化の醸成とラグビーワールドカップ2019のレガシーを後世へ継承することによりラグビーの聖地化を図るため、①する、②みる、③ささえる、④まなぶ、⑤楽しむ、の5つの視点で環境づくりを推進
- ・ラグビーワールドカップ2019を契機に認識が高まったラグビーの意義や魅力及び大会実績を次世代を担う子供たちに継承するため、ラグビー伝承本を県内小中高校生対象に作成・配布し、ラグビーの精神を学校教育に活用

#### ○エコパ5面化の利活用（スポーツ・文化観光部スポーツ政策課）参考資料 P32

- ・ラグビーの聖地化に向け、エコパの拠点化を図るため、ラグビーグラウンドの5面化を活かした大会や合宿の誘致を推進

#### ○ラグビー教育の推進（教育委員会健康体育課、スポーツ・文化観光部スポーツ政策課）

参考資料 P34

- ・ラグビー日本代表等による出前授業、ラグビー体験授業、ラグビー部等へ活動支援、体力向上の取組支援等を実施

#### ○オリンピック・パラリンピック教育の推進（教育委員会健康体育課）参考資料 P35

- ・オリンピック・パラリンピックを題材とした授業の実施、講演会、交流活動、効果的な教育実践に関する関係者による協議、セミナーを実施

## **○オリパラ運営体験プログラムの実施**（スポーツ・文化観光部オリンピック・パラリンピック推進課）

参考資料 P36

- ・東京 2020 大会を契機とした人づくりを実施するにあたり、高校生・大学生等に大会の準備・運営を通じてスポーツの価値や魅力等を学び、参画する機会を創出

## **○東京 2020 大会学校連携観戦プログラムへの参加**（スポーツ・文化観光部オリンピック・パラリンピック推進課） 参考資料 P37

- ・東京 2020 大会組織委員会が企画した学校連携観戦プログラムに参加し、次代を担う多くの子供達に本大会を生で観戦する機会を提供

## **○東京オリンピック・パラリンピック自転車競技レガシー創出に向けた取組**

（スポーツ・文化観光部スポーツ政策課） 参考資料 P38

- ・自転車文化の醸成と自転車文化の発信のための体制等を整備するとともに、国際大会の誘致や開催に向けた準備を実施

## **○サイクルスポーツの聖地づくり**（スポーツ・文化観光部スポーツ政策課）

参考資料 P39

- ・サイクルスポーツの聖地づくりのため、市町や関係団体等と連携し、競技やサイクルツーリズムの振興、自転車利用の視野拡大、走行空間の整備を推進

## **○スポーツ聖地づくり**（スポーツ・文化観光部スポーツ政策課） 参考資料 P40

- ・スポーツの聖地づくりのため、参画人口の拡大、人材と場の充実、地域活性化、競技力向上等を部局横断で総合的に推進

## **2 文化芸術の振興**

### **○ふじのくに子ども芸術大学の実施**（スポーツ・文化観光部文化政策課） 参考資料 P41

- ・子どもが本物の文化に触れる機会の充実のため、小・中学生を対象に、活躍するアーティスト等による体験・創造講座を実施

### **○子どもが文化と出会う機会の創出**（スポーツ・文化観光部文化政策課） 参考資料 P42

- ・プロオーケストラが学校を訪問し、音楽プログラムや未就学児コンサートを実施
- ・SPACが学校等を訪問し、演劇プログラム等を実施

### **○SPAC演劇アカデミーの開催**（スポーツ・文化観光部文化政策課） 参考資料 P44

- ・高校生を対象に「演劇の都」を担える人材を養成する演劇スクール「SPAC演劇アカデミー」を開催

### **○オリンピック・パラリンピック文化プログラムの推進**（スポーツ・文化観光部文化政策課） 参考資料 P45

- ・文化芸術の力を活かし地域活性化に取り組む地域部活「掛川未来創造部 Palette（掛川市）」や「地域情報誌制作プロジェクト（伊豆市）」等を支援

## 「誰もがスポーツ・文化芸術活動に親しめる環境の整備」に関する実践委員会の意見

- SPAC演劇アカデミーにおいて、高校生に対し、演劇をする上で学問は必ず役に立つと言っている。自分のやりたいことに役立つと思えば、急に学問にも興味が湧いてくる。回り道は損だというコスパ至上主義のようなものが芸術家を目指す人にも広まっているが、遠くまで到達するためにもっと回り道をしようと言っており、それがいずれ世界の第一線で活躍できる人材の育成につながっていくと信じている。
- デジタルミュージアムは、現物を見るわけではないので懐疑的であったが、コロナ禍で一気に広がり、その効能の方がはるかに大きいことが分かった。芸術に触れる機会やアクセスする機会は平等にしたい。そのためには、デジタルミュージアムは有効であり、こうしたできあがっている仕組みを利用するのも一つの考え方である。
- 美術品は、実物を見なければ本物の感動を伝えられないと思っていたが、オンライン講座で画像を使って説明して、言葉で画像の持っている特質を伝えることができると感じた。言葉はすごく大事で、人の感情を言葉で伝えることにより、本物を見たいという気持ちを起こさせることができ、美術品の感動を広く伝えていくことに意味がある。
- 伊豆では、自転車が増えているが、自転車で走っている人と車を運転する人の呼吸が合い、思いやり、譲り合いができつつあると感じる。
- 学校や生徒の活動現場は、競技選手化したコア層と楽しみながら運動したいというライト層の二極化が進んでいる。スポーツ行政を考えていく場合、後者との絡みが大事であり、県のスポーツ人材バンク制度は非常に面白い。
- 空手の例で言えば、①県の人材バンクを受け皿として指導者登録を増やす、②日本スポーツ協会又は県スポーツ協会の協力のもとに体育の教員に基本と型を伝授する、③中学校をプラットフォームとしてスポーツ少年団活動の組織づくりをする、④スポーツ少年団活動と授業を連動させ、しずおか型部活動の推進につなげていくことも可能性としてある。
- スポーツ人材バンクの種目別の登録者数の資料を各委員に配ってほしい。
- ラグビー協会が一般社団法人化したのが、競技人口を増やす、強くするということにとどまると、スポーツが衰退していくことになる。スポーツを通じて地域社会や企業が抱える課題を解決するというwin-winの関係を作りながら静岡県に寄与していきたい。
- 県外の人から、静岡県は心身ともに健全な環境で生活してきたと言ってもらえるように、様々な機会を通じて取り組んでいきたい。
- ハード面に加え、ソフト面として世代を超えた食育も推進してほしい。栄養士も多く、食材等も非常に豊かな環境にある。県のリーダーシップで、現場レベルでつなげ、心身ともに強く豊かな子供が育つ日本でナンバーワンの県を実現する取組をしてほしい。

- スポーツにジェンダーという視点も入れてほしい。スポーツを行っていく上で、女子の生理のことを男性のコーチにも分かってもらうことが重要である。男子も思春期にはホルモンのアンバランスで荒れることもあるので、性教育も含めた形でスポーツ教育を考えてほしい。
- 最近では新聞を取っていない家庭も多く、新聞のみならず、家の中に活字がない環境で子供たちが育っている。ICTの利点を生かしつつ、本を読む習慣付けや図書館の充実等を通じ、深く様々な探究心が持てるような教育の在り方が大事である。
- ノーベル化学賞を受賞した野依先生が、化学者になる人はリベラルアーツをきちんと学んでいないと方向性を間違っていると語っていた。全人教育のため、本を読んだり、素晴らしい芸術を見たり、自分でパフォーマンスをしたりすることをICTと同時に更に深めていくようなことを静岡から全国へ広げてほしい。
- 今の中高生はyoutubeやTikTokの世代で、表現する機会が多くレベルも高いが、薄っぺらな表現者になってほしくないため、教育現場では、学問、教養、哲学などの機会をしっかりと提供していくことが大切である。
- 高校生の美術展が毎年開催され、技術も上がっており、華やかな作品が並ぶ。タブレットで全世界から素材を集められるので面白い作品はできてくるが、自ら進んで創出するという点では薄っぺらくなっている。スケッチしたり自然と向き合ったりする時間がなく、観察する力、受け止める力は低下している。ICTでは、人と人だけでなく、人と自然も離れてしまい、自分の中で調和をとる時間がなくなってくる。ICTのこの弊害は、伝統的な和の文化が解消してくれると確信している。ICTに入れる熱量と同じだけ日本文化の活性化に力を入れてもらいたい。
- ICTが全員に普及するものであるなら、和文化も全員に体験してもらいたい。和文化の体験で最も良いのは俳句を詠むことで、授業の中に限らずどこでもできる。また、お茶を入れることも芸となる。健康を目的としたお茶の愛飲を促進する取組は既にあるが、文化的取組として広げてほしい。茶文化は日本の頂点文化であり、これを積み上げていけばほぼ全ての日本文化に関わっていく。静岡は良い素材を持っているので、そういうところからバランスをとっていったらよい。
- 子供たちの感受性が強くなるのは小学4年生頃かららしいので、親は小学校時代に子供たちを世界的な美術品の展示に連れて行ってほしい。親と一緒に美術品を見たことは忘れられず、心に刻まれ、その感動が人間の心を育成することになる。
- 表現力を養成する取組として、企業や店舗を小学4年生から6年生が訪れ、体験するだけでなく、取材をして、子供会議をしてポスターを作るという事例がある。インターネットにもパンフレットにも載っていない取材でしか分からない情報をポスターに表現して大人たちに教えるというミッションを出している。子供たちは、体験した自分たちしか分からない話を伝えようとして、4コマ漫画にしたり、クイズ形式にしたりして表現してくれる。取材をすることで、前に踏み出す力、チームで働く力、考え抜く力がつく。リアルな情報を伝えてほしいと伝えることで、薄っぺらな表現にならないようになってきた。